

オリエンテーションは実習の最初（月曜日）に婦長、またはこれに代わる者（婦長指示）が行ないます。カンファレンスは週 1 回 5 分～20 分程度、必要あれば看護婦を交えて行ない、内容については患者看護の実際について、その他学生が遭遇した問題についてなど、問題は数多くあります。

指導 臨牀指導者は特別においてないので、婦長の責任下において、指導要項にもとづき適当な看護婦をその任にあたりますが、なお看護婦全員が臨床指導者としての心構えをもつように要請しています。現在適切な看護手順は研究中です。

評価 実習中、実習経験録の点検をたびたびするとともに、実習終了事前には個々の学生と面接し、評価は評価表に記載して総婦長室に提出します（総婦長室から学校教務へ提出する）。

現在の問題点

1. 人手不足 各部門の業務分担が明瞭でなく、これがおおいに看護業務に影響し、人手不足に拍

車をかけています。

2. 処置が多い。

3. 基準給食・基準寝具の実施法について人手の問題、責任の問題に検討・研究が必要です。

4. 患者の地域的な問題が多く離島からの患者、経済的なもの、連絡の不便などがあげられます。

5. 各看護単位ごとにカンファレンスなどするに必要な小室がほしいなど問題点は数多あります。

将来への抱負

1. 看護要員の増加
2. 看護業務の分析
3. 看護水準をあげてゆくためには一層緊密な横のつながりで限られた時間内に業務を果たす
4. 病院内各部門との連絡協議の必要性
5. 治療予防を含めての患者教育の強調
6. 看護教育の場としての内容の充実をはかる
7. よりよい看護の進展を期するために、地域社会と深く結びついた看護を实践できるよう、向上への努力をつづけたいものと思います。

（鹿児島大学医学部付属病院 第二内科婦長）

編集デスク <15>

フランクフルトの国際書籍見本市には世界各国から有数の出版社が参加したから、昨年第 13 回の全参加出版社の数は 1893 社の多きにのぼった。

日本からも講談社・丸善・彰国社などをはじめ数社が展示に参加した。大部分は Books from Japan というスタンドに各社一緒に展示をしたのである。独立して一つのスタンドを持ったのは医学書院だけであった。

医学書院はこの展示会に初参加であったが、それなりの効果はあがったと思っている。

私のフランクフルト滞在は、わずか 1 週間で、それもほとんど見本市会場に釘づけであったから、会期中

のある 1 日の午後の 3 時間ほどを市内を大急ぎで歩きまわって有名なゲーテ・ハウスやヘンゲル塔（東京でいえば東京タワーのようなところ）マイン河畔などを見て廻ったに過ぎない。

しかし、フランクフルトは今から 7 年前の訪欧の時に訪れたことのある

「本の饗宴」
のことなど

—— 長谷川 泉 ——

る街であるから、街のオリエンテーションはついていて、見るべきところは見たし、つかむべきところはつかんだと思っている。

10 月の終わりに帰国して、「本の饗宴」(Frankfurt Book Fair impressed me……)という小冊子の報

告書を出版した。本は 12 月の初旬にできた。

これはフランクフルト書籍見本市の事務局にも送ったが、とにかく各国の千数百社の参加出版社のなかで、展示会終了後いち早く最初に出版された報告書である。

国際的なこのフランクフルト書籍見本市のことを広く紹介する気持ちもあったが、内容はかなり随筆的にくだった記述をとり、ふだんから考へている出版についてのものの考え方や書籍についての感想なども盛り込んだ。読者のなかには、その点が面白いと言ってくれる者もあった。7 年前の訪欧記「西と東—訪欧の旅に拾う」のあとを受けるものである。

とにかく、フランクフルト書籍展参加が、医学書院が国際的な舞台で今後仕事をしてゆく一つの契機となったことだけはたしかである。